

北方町文化財報告書第2集

# 速日峰地区遺跡

平成2年度県営ば場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1991年3月

宮崎県東臼杵郡北方町教育委員会



速日峰地区遺跡周辺航空写真

## 序

この報告書は、東山杵農林振興局の委託を受けて平成2年8月1日より平成3年3月30日まで、早中・早下地区内に所在する速日峰地区遺跡の発掘調査を行った記録であります。この遺跡の調査によって、古墳時代の住居跡・中世の建物群・土塙をはじめ各時代の土器や石器・陶磁器・明鏡等が多数発見されました。

これらは、町内はもちろん宮崎県内における貴重な研究資料になることでしょう。

調査に関しましては、地元の方々をはじめ、関係各位の御協力をいただき、多大な成果を上げることができました。心から感謝申し上げます。

本書が、文化財愛護思想の普及、学術研究等広く活用されれば幸いります。

平成3年3月30日

北 方 町 教 育 委 員 会

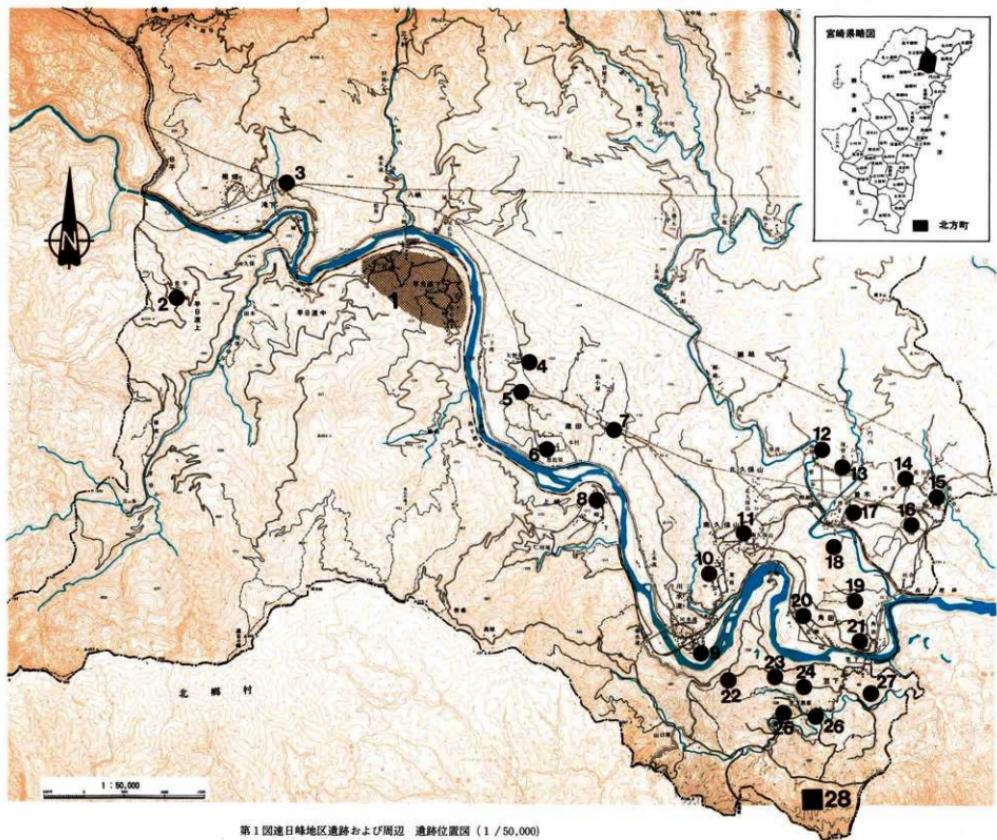
教育長 河 井 行 雄

## 例　　言

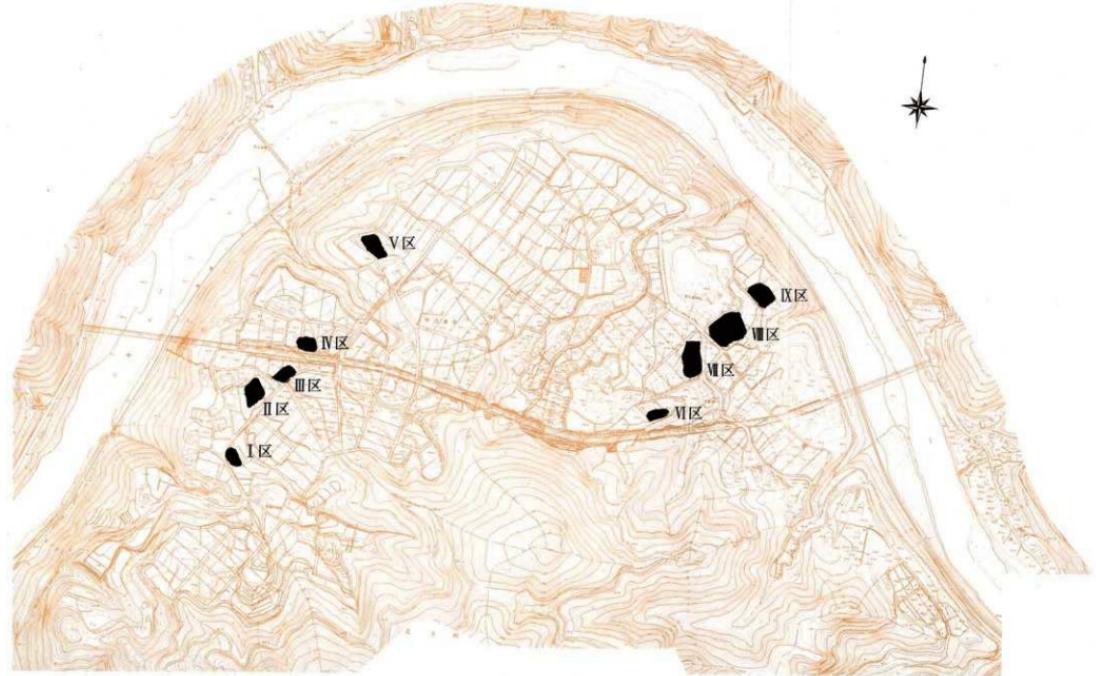
1. 本書は、速日峰地区県営ほ場整備事業に伴い、平成2年8月1日より平成3年3月30日まで、実施した埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県東臼杵農林振興局の委託を受けて北方町教育委員会が実施した。
3. 現地の実測図は、小野信彦・飯田博之の他に、北郷泰道・吉永真也（県文化課）、岡本武範（日南市教育委員会）、大久保やよ子・甲佐千代美・佐藤きみえ・田口真理子・富山絹代・吉田純子（北方町）が行った。
4. 掲載の写真的うち、空中写真はスカイサーベイが、遺構・遺物は小野・飯田が撮影した。
5. 本書の実測・拓本・トレースは各担当者が行った。
6. 石材の鑑定に関しては、松田正利氏（延岡市）の御教示を得た。
7. 本書に使用したレベルは、全て海拔高で表示した。また、本書の方位は全て磁北である。
8. 本書の執筆はⅡを各調査担当者が分担し、Ⅰ・Ⅲ及び編集は小野が行った。
9. 魚字は飯干宣仁氏（北方町教育委員会）の揮毫による。
10. 遺物等は、北方町教育委員会で保管している。

## 目　　次

Iはじめに	1
II 調査の内容	
1. I区の調査	2
2. II区の調査	3
3. III区の調査	9
4. IV区の調査	14
5. V区の調査	19
6. VI区の調査	20
7. VII区の調査	22
8. VIII区の調査	25
IIIおわりに	26



第1図 速日峰地区遺跡および周辺 遺跡位置図 (1 / 50,000)



1 : 7,500  
0 100 200 300 400 500 600m

第2図 遠日峰地区進路調査区図 (1 / 7,500)

# I. はじめに

## 1. 遺跡の位置及び調査に至る経緯

東臼杵郡北方町早中・早下地区は、五ヶ瀬川が北に大きく蛇行してきた標高約120m程の舌状の台地上に位置する。台地縁辺は急崖を形成し、五ヶ瀬川との比高差は70m程である。台地上は湧水等で浸透され、平坦部は少ない。耕作地は狭い平坦部を有効に利用したり、尾根を階段状に開墾して作られている。宮崎県東臼杵農林振興局では、早中・早下地区のほ場整備事業を計画し、平成2年度に事業認可を受けると同時に工事を実施することになった。

早中・早下地区では、これまで2ヵ所の遺跡が知られていた。<sup>注1</sup>さらに、県教育委員会による昭和63年度の北方バイパスに伴う分布及び試掘調査で、縄文早期の遺跡2ヵ所、和鏡の出土地の1ヵ所が確認された。<sup>注2</sup>このため、県教育委員会で事業計画地の分布調査を実施した。対象地の大部分が水田のため、遺物散布地と確認されたのは1ヶ所のみであったが、地形的な面からさらには14ヶ所程の遺跡が予想された。そこで県教育委員会では、平成2年度の工事予定地内8ヶ所の試掘調査を4月16日から24日まで実施し、6ヵ所で遺跡の所在を確認した。

試掘調査の結果に基づき、確認された遺跡の保存法について町教育委員会・県教育委員会は東臼杵農林振興局・速日峰土地改良区と協議を重ね、遺跡が影響を受ける部分については、発掘調査を実施し記録保存措置をとることになった。発掘調査は、東臼杵農林振興局の依頼を受けて町教育委員会が、平成2年8月1日から平成3年3月30日まで実施した。

当初Ⅱ・Ⅲ区は、本年度の調査対象地ではなかったので、試掘調査を行っていない。また、Ⅶ区は本年度調査対象地であったが、諸般の事情により調査が来年度以降となったため、Ⅴ区の調査を行った。

調査組織は、以下のとおりである。調査にあたっては宮崎県文化課、日向市教育委員会、日南市教育委員会の指導・助言及び協力を得た。

### 調査主体 北方町教育委員会

教 育 長	河 井 行 雄
社会教育課長	三 浦 弘
事務担当	社会教育課長補佐
調査担当	社会教育課主事
	宮崎県文化課主事

注1 北方町教育委員会『笠下遺跡』(1990)

注2 宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書第33集』(1991)

\* 和鏡については北方町早下藤本源氏、<sup>注3</sup>宮崎県文化課主任主事長津宗重氏の御教示による。

## II. 調査の内容

### 1. I区の調査

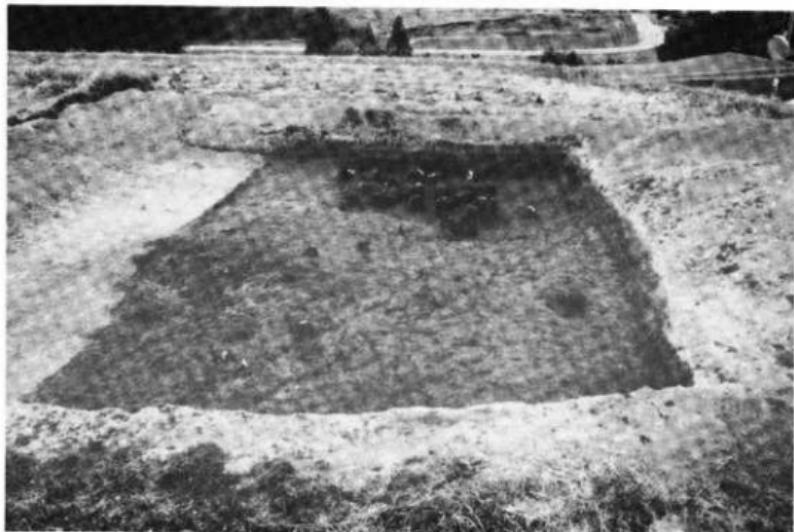


写真1 I区近景（東より）

#### (1) I区の調査

I区は、西側に向かって下る斜面を田に造成した所に位置する。近くに、天保年間等の墓石があることから、江戸時代より耕作地は変わっていないと思われる。

まず、トレーニングを設けて土層及び遺構の確認を行なった。その結果、表土の下はローム質で、包含層は検出できなかった。遺物も、チャート片・打製石斧・繩文土器片・土師器片・陶磁器等が混在しており、耕作地造成の際、かなりの削平が行なわれたと思われる。



第3図 I区調査区位置図 (1 / 2,000)

## 2. II区の調査

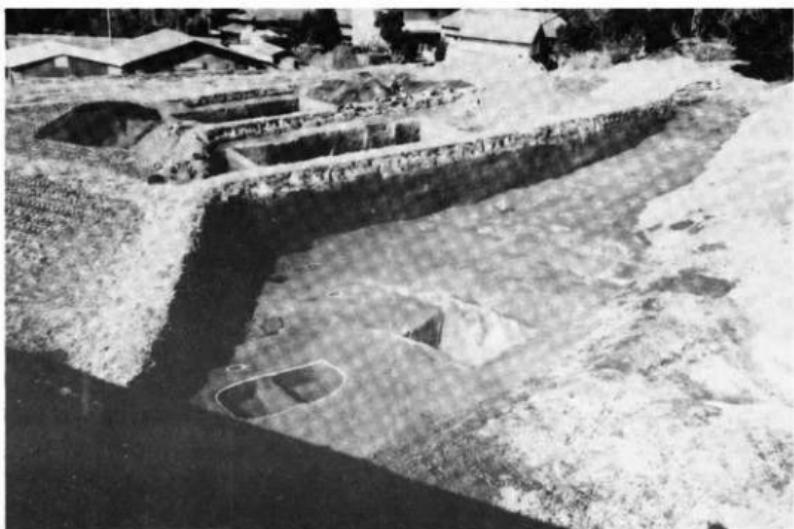


写真2 II区近景（南東より）

### (1) 調査の概要

II区は西側に向かって下る斜面を田に造成した部分に位置する。地形的には、IV区と同じ様相を呈している。調査は工事の影響をうける3枚の田にトレントを設けて、土層及び遺構の検出を行なった。

調査の結果、竪穴住居跡1軒・土塙1基・多数のビット群を検出した。

遺物には、打製石斧・石鎌等の石器類、弥生土器・土師器・須恵器・青磁等があるが、客上からの出土である。

### (2) 検出遺構

竪穴住居跡は方形プランで、長軸8.5m、短軸7.3mを計り、かなり大型である。主柱穴は4本で、やや中央よりである。床面はほぼフラットで、ベッド状遺構等の付属施設はない。東側の壁の高さは、1mを超えており、床面をフラットにするため斜面を無理に掘り下げたためと思われる。遺物は完形に近い壺が出土した以外はすべて小破片の土器であった。

土塙は、調査区の南端で検出した。長方形プランを呈し、長軸2m・短軸1.3m・深さ0.5mを計る。出土遺物はなかった。

ビット群は、明確な規格性を見出しえず、掘立柱建物・柵列等に復元できなかった。

### (3) 石 器

II区で出土した石器は、石斧・石鎌・剥片等である。ほとんどが、客土中より出土した。1は、流紋岩製の剥片である。打面及び自然面を有する。2は砂岩製の打製石器である。弧状の刃部をもち、側面はえぐる感じで両方向に丁寧な加工が施されている。3は、片岩質の磨製石鎌である。先端及び基部が欠損している。仕上げは粗い。

### (4) 土 器

#### ① 弥生時代

1は、客土内出土の二重口縁壺である。口縁部外面に櫛描波状文が施されている。頸部外面に、ハケ目の痕跡がみられるが、風化が著しく明瞭ではない。胴部は斜め方向のタタキがみられる。内面は、口縁部でナデ、頸部では指による圧痕が、胴部にはナデがみられるが、いずれも風化が著しく明瞭ではない。2は、客土内出土のいわゆる「下城式」とよばれる甕の口縁部片である。口縁の断面は角ぼっていて、突帯には刻目をもつ。調整は、外面は、突帯から口縁にかけてナデがみられるが、突帯の下には、斜め方向のハケ目がみられる。内面には横方向のハケ目がみられる。

#### ② 古墳時代

遺物は、客土と住居跡からの出土である。3は、客土内出土の須恵器の高杯の脚部で、四方透しと思われる。調整は、内・外面とも横方向のナデである。外面には、十字の線刻文様がみられる。4は、住居跡出土の甕である。頸部から口縁にかけて直行し、あげ底である。調整は外面で、口縁部にハケ目がほどこされているが、胴部は風化が著しく不明瞭である。内面は口縁がハケ目を施した後、指による圧痕がみられる。頸部付近にはハケ目が、底部付近はナデと指の圧痕が施されている。5は3と同じ客土内出土の須恵器の胴部片である。調整は、外面が格子目タタキで、内面は同心円タタキをナデでけしている。

#### ③ 平安時代

6は甕の口頸部片である。頸部から口縁にかけて直行し、端部はほぼ平坦であるが、つまみ出しがみられる。口縁部と頸部の間にはくぼみがみられる。調整は、外面では口縁部にナデがみられ、頸部より下はタタキの後、縱方向のハケ目が施されている。内面は、口縁で横方向のハケ目がみられ、頸部より下は、横方向に強いナデがみられる。

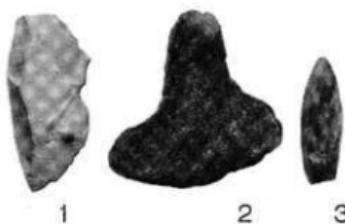
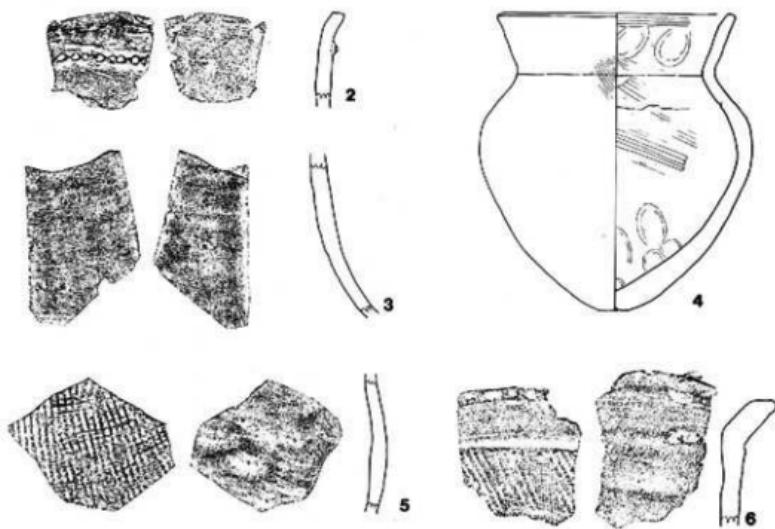
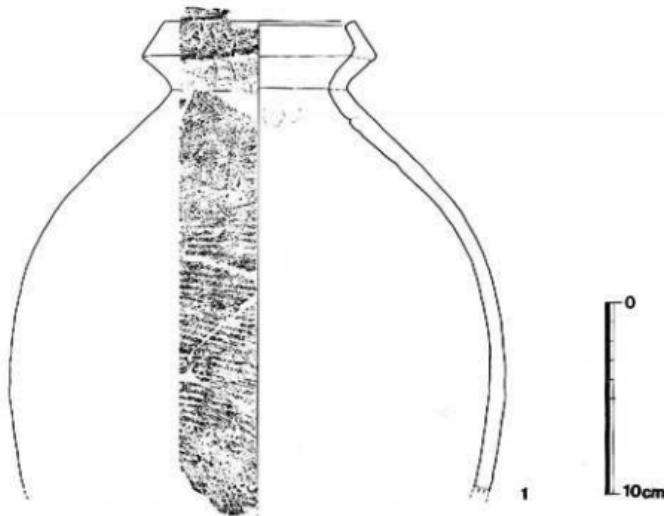


写真3 石 器



第4図 2区出土遺物 (1 / 3)



写真4  
II区近景  
(北より)

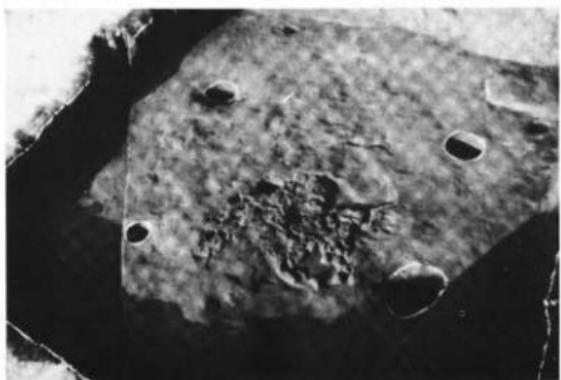
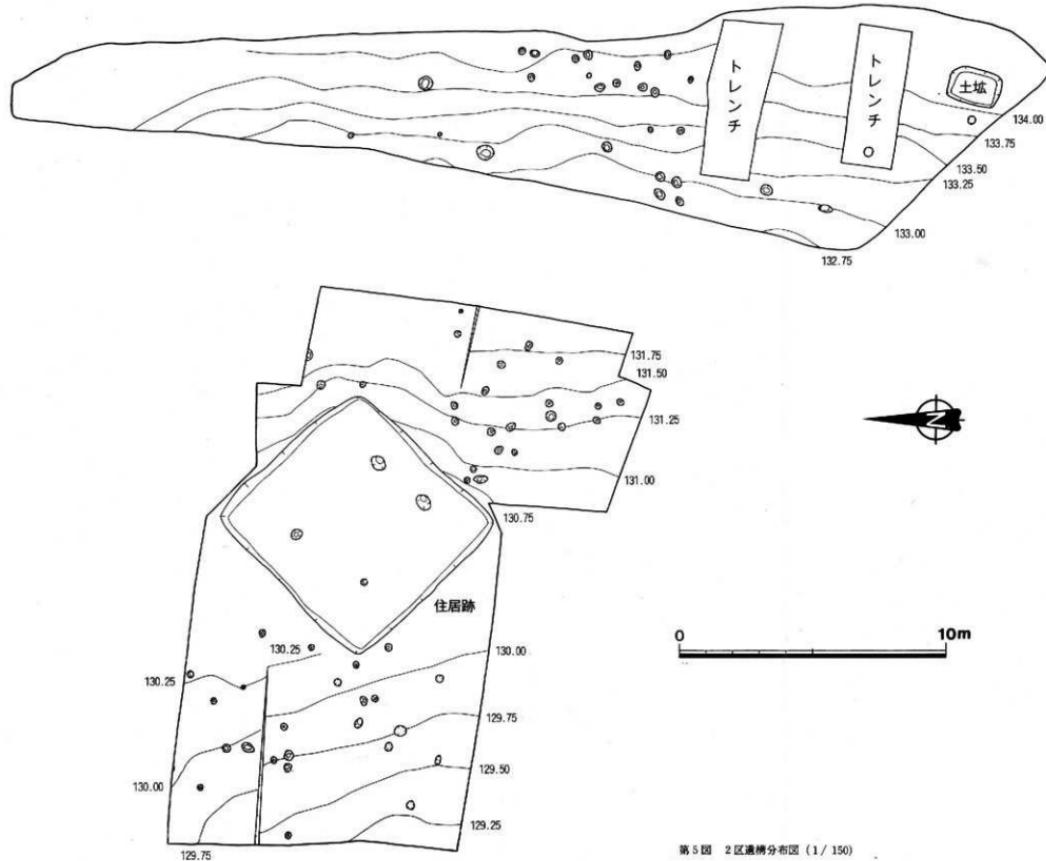


写真5  
竪穴住居跡  
(南西より)



写真6  
土 塚  
(南西より)



第5図 2区遺構分布図 (1 / 150)

### 3. III区の調査



写真7 III区空中写真

#### (1) 調査の概要

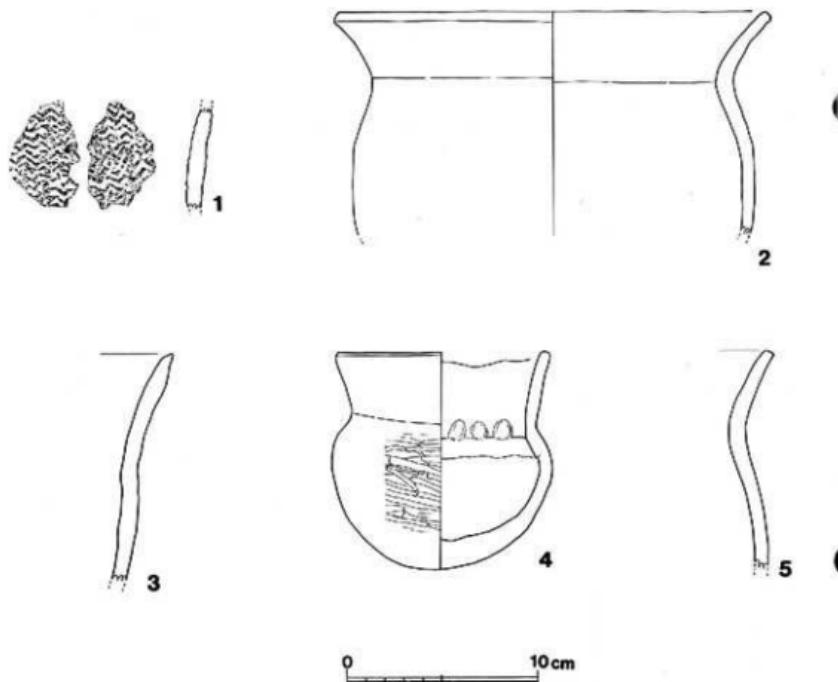
III区は、尾根づたいに田を開いたところで、2区や4区に比べると、平坦な地形であった。表土剥ぎを重機によって行なった結果、耕作土と田の基盤層のすぐ下はアカホヤ層があらわれ、住居跡及び、ピット群、土塙等の遺構を検出した。

遺構としては、古墳時代の住居跡8軒、土塙2基、多数のピット群を検出した。住居跡はほとんどが、方形プランで主柱穴は4本であった。ピット群については、柵列と思われる並びもあるが、明らかではない。なお、6号住居跡からは、勾玉を意識した石製装飾品が、7号住居跡からは、管玉が出土しており注目される。

#### (2) 出土 遺物

主に住居跡内及びトレンチより縄文土器等が出土した。1はトレンチによる掘り下げで検出した山形押型文の縄文土器である。2は、2号住居跡出土の壺である。頸部から口縁にかけて、やや外側へ聞くように直行している。端部はほぼ平坦であるが、外側につまみ出しを施している。調整は、内・外面ともナデがみられる。3は6号住居跡出土の壺である。頸部から口縁にかけてやや聞くように直行している。端部は指によるつまみ出しでシャープである。調整は口縁部の内・外面が斜め方向のナデで、頸部から胴部にかけての外面は斜め方向のヘラ状工具によるナデがみられる。4は、3号住居跡出土の壺で、完形である。器高は11.5cmを計る。口縁は直

行し、端部はやや丸みをおびる。頸部のくびれは緩やかで胴部がふくらみ底部は丸底である。口縁部の内・外面ともナデを施す。内面には、一部、板状工具による圧痕がみられる。頸部の内面には、指による圧痕が、外面はナデがみられる。胴部の外面には、横方向のヘラ磨きが施されている。底部は丁寧なナデである。また、底部以外の外面にはススが付着している。5は2号住居跡出土の甕である。口縁は外側にやや開くように直行している。端部は、やや丸みをおびる。調整は風化が著しく、内・外面とも不明瞭である。外面にススが付着している。



第6図 3区出土遺物 (1 / 3)

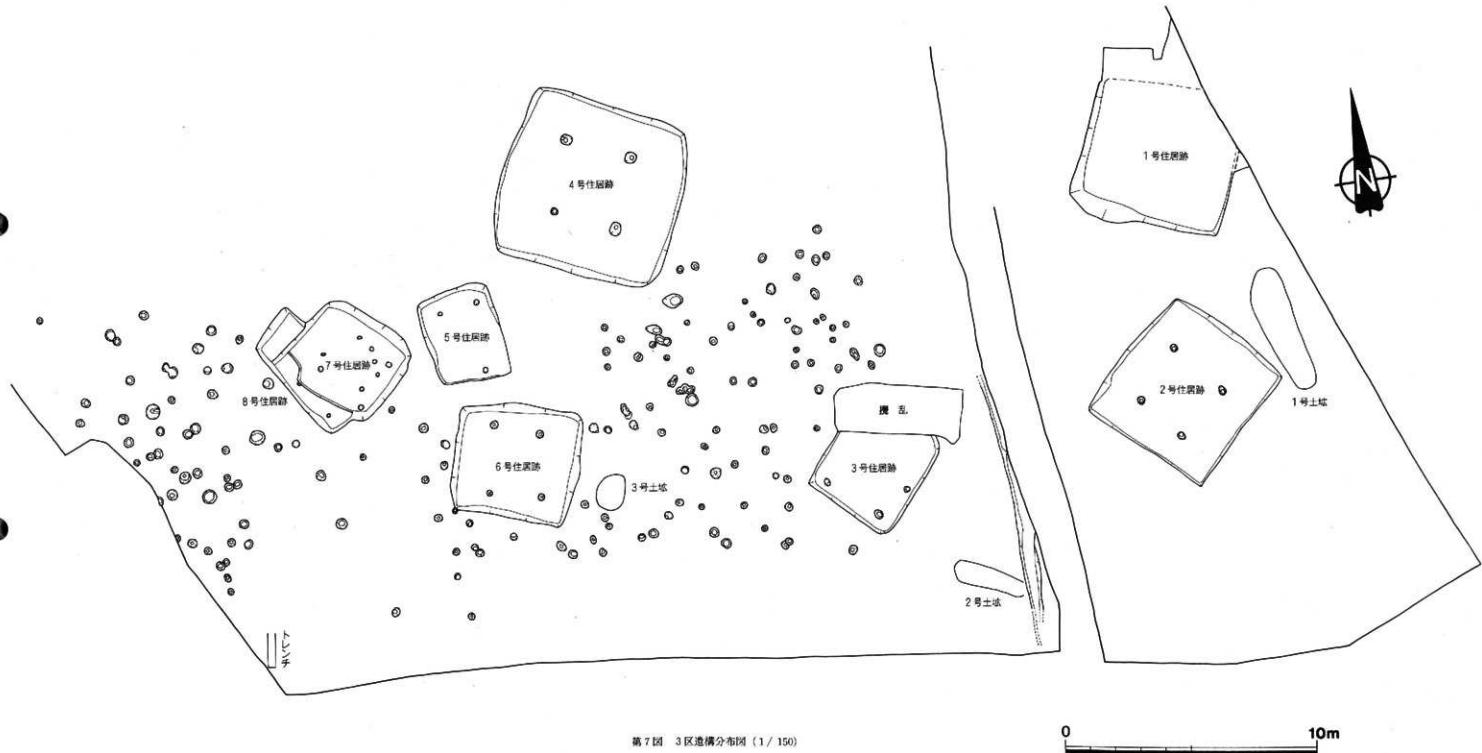


写真8  
2号住居跡  
(東より)



写真9  
1号住居跡  
(西より)



写真10  
7・8号住居跡  
(南より)



#### 4. IV区の調査



写真11 IV区空中写真

##### (1) 調査の概要

調査は、トレッセを3本設けて土層及び遺構の確認を行なった。表土からは、縄文土器片、須恵器片、陶磁器等を検出した。

調査区の南側は約3mほど削られていて、アカホヤ層から上はなくなつておらず、表土のすぐ下にはローム層が露出している。北側は谷で、かなり深くなつていて。また、西側はアカホヤ層がブロック状に残っていた。

調査は表土除去の後、客土を取り除いて旧地形の復元を試みた。その結果、客土の下の黒色土から多量の縄文時代後期の遺物が出土したが、弥生時代の遺物も若干みられ、流れ込みの可能性がある。

黒色土を掘り下げたところ、暗黄褐色土に掘りこまれている古墳時代の竪穴住居跡2軒、時期不明の土塙3基、多数のビット群を検出した。

## (2) 縄文時代

### ① 石 器

IV区から出土した石器は、石斧・石匙・敲石・石錘・石核・剝片等である。石材は、砂岩・流紋岩・チャート・黒曜石等を使用している。

1～6は、石錘で、石材は、すべてチャート製である。他に、まれに安山岩を使用した石錘もある。1～6の石錘は抉りが深く、錐形錘と呼ばれるものである。1と3は鋸歯状の縁をもつ。

7は数回の打撃によって打面を形成し、そこから剝片をとる石核である。石材はホルンフェルスで、長さ12.2cm、最大幅は9.4cmを計る。

8は、砂岩製の敲石で、端部に敲打痕がみられる。長さ9.3cm、最大幅は6.0cmを計る。9は片岩製の敲石である。長さは12.8cm、最大幅5.1cmを計る。両端部に敲打痕がみられる。10～12は石錘で、10は結晶片岩、11・12は砂岩と思われる。いずれも、両端部に打ち欠きがみられるが、12はさらに、全周を丁寧な打痕でつないでいる。

13～16は砂岩製の扁平打製石斧である。14は、長さ14.1cm、幅は基部が5.4cm、刃部6.7cmを計る。15は長さ12.6cm、幅は基部が3.2cm、刃部が5.7cmを計る。形状は片側は直で、片側が抉れて撥形を呈している。16は長さ12.3cm、幅は基部が4.3cm、刃部が8.2cmを計り、基部は抉れ、弧状の刃部をもつ。

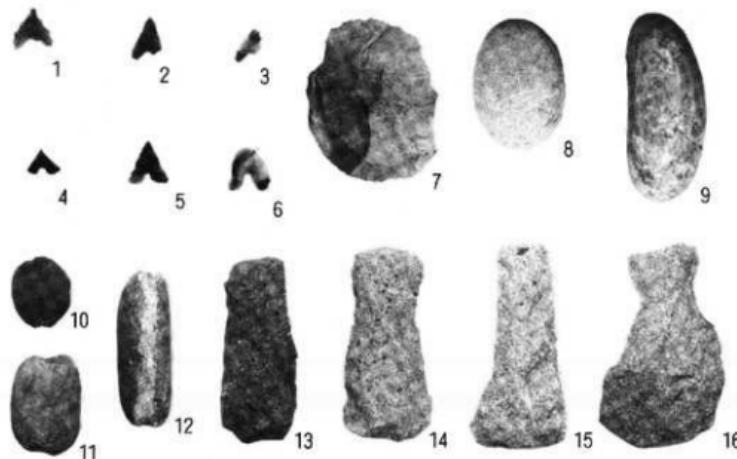


写真12 IV区出土石器

## ② 土 器

1は深鉢の口縁部片である。頸部から口縁部にかけて外反ののち、内傾する。外面の調整は、口縁部に貝殻条痕を、頸部にはナデが施されている。内面には、ヨコ方向のミガキが施されている。2は、胴部片である。調整は外面で凹線文が施され、内面は横方向のナデである。3は、深鉢の口縁部片である。頸部から口縁にかけて緩やかに外反する。調整は内・外面とも貝殻条痕である。4は、深鉢の口縁部片である。口縁部は、緩やかに外反している。調整は外面でナデののち、凹線文が施されている。内面にはヨコ方向の貝殻条痕を施す。5・6・7は、市来系の土器である。5は、深鉢の頸部片で、頸部から口縁下半部にかけてゆるやかに外反する。調整は、外面が斜め方向の貝殻腹縁による連続刺突文が施されている。内面には強いヨコナデがみられる。6は、深鉢の頸部片で、頸部から口縁下半部にかけては緩やかに外反する。調整は、外面に、貝殻腹縁による斜め方向の連続刺突文が施されている。内面には、貝殻条痕がみられる。7は、深鉢の口縁下半部片であり、緩やかに外反し、突帯をもつ。調整は、外面が突帯をはさんで貝殻の腹縁による連続刺突文が施されている。刺突文の下には貝殻条痕が施されている。内面は、ヨコ方向の貝殻条痕のあと、斜め方向のナデがみられる。8は、深鉢の口縁部片である。頸部から口縁部にかけては外側に膨らんだのち、内湾する。調整は外面が、貝殻の腹縁による刺突の後、沈線を施しナデで磨消している。内面はヨコ方向のナデがみられる。

9は、深鉢の口縁部片である。頸部から口縁にかけて緩やかに外反し、端部は肥厚する。調整は外面・内面ともミガキが施されている。10は、深鉢の口縁部片である。口縁近くに突帯をもうけている。調整は内・外面ともヨコ方向のナデが施されている。11は、深鉢の口縁部片である。波状口縁で、やや内反している。調整は、内・外面ともヨコ方向のナデが施されている。

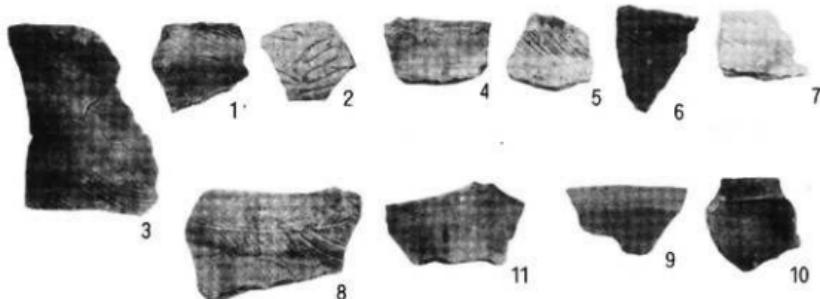


写真13 IV区出土縄文土器

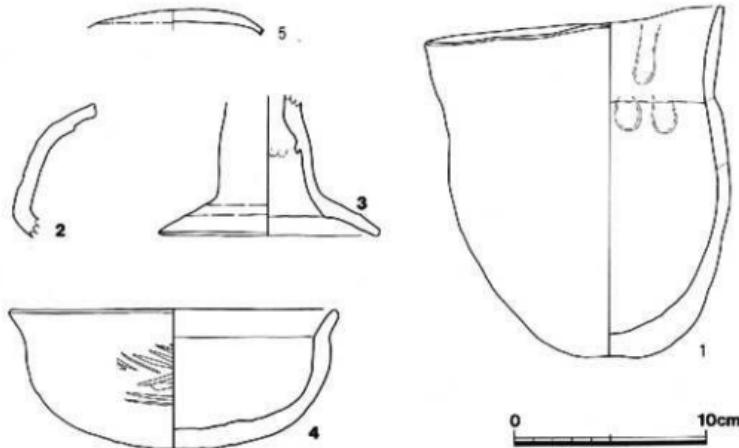


第8図 4区出土繩文土器 (1 / 3)

### (3) 古墳時代

遺物はほとんどが住居跡出土の土器である。1は、2号住居跡出土の甕である。ほぼ完形で器高は17.6cm、口径は外径で15.8cmである。内外面ともナデがみられる。風化が著しい。頸部の内面に指の圧痕がみられる。2は、2号住居跡出土の鉢である。口縁部は外反し、頸部のやや下の部分が肥厚する。内・外面ともにナデ仕上げがみられるが一部にはタタキも施してある。3は、2号住居跡出土の高杯の脚部である。裾部には、ナデ仕上げが施してあるようだが、風化が著しく明瞭ではない。シボリの仕上げも一部でみられる。内面に、粗いヘラナデを施す。形態としては、エンタシス状のふくらみがあり、裾部は内側にやや反るようである。4は1号住居跡出土の須恵器壺の口頸部片である。口縁部近くで、段を持ち外反する。内・外部とも丁寧なヨコナデである。5は、1号住居跡の埋土から出土した、須恵器の蓋である。口縁部は欠損して不明瞭であるが、内・外面とも丁寧なナデ仕上げである。外面には自然釉が見られる。

写真14 IV区出土須恵器



第9図 4区古墳時代出土遺物 (1 / 3)

## 5. V区の調査

V区は、IV区の北東の台地先端部に位置する。間に小さな谷を挟む。工事の影響を受ける3枚の田にトレッセを入れたところ、南東部分の3分の1は田の整地を受け、地山まで削平されていた事を確認した。

このため調査は、北西に伸びる台地先端部のアカホヤ層の残る部分を主に掘り下げた。

包含層中よりの出土遺物はほとんどなく、埋土中より、陶磁器・土師器・石錫等が若干出土したのみであった。



写真15 V区近景（東より）



第10図 5区調査区位置図 (1 / 2,000)

## 6. VII区の調査

VII区は、金龍寺の西南、細長い舌状丘陵の先端部に位置する。調査区の先端部及び中央西側半分が耕作のため削平を受けていた。検出遺構は若干のピットと土塙を1基である。土塙中より遺物の出土はなかった。遺物は表土中より、陶磁器等が少量出土したのみである。

中央部北半分はアカホヤ層が良好な状態で残っており、土塙4基及び多数のピット群を検出したが時期などは不明である。アカホヤ層を除去した所、集石遺構3基と、それに隣接して遺物集中部及び焼石群1ヶ所を検出した。出土遺物はチャート片及び石鏃が主で、若干の土器細片が伴う。

写真16  
Ⅲ区先端部近景  
(西より)

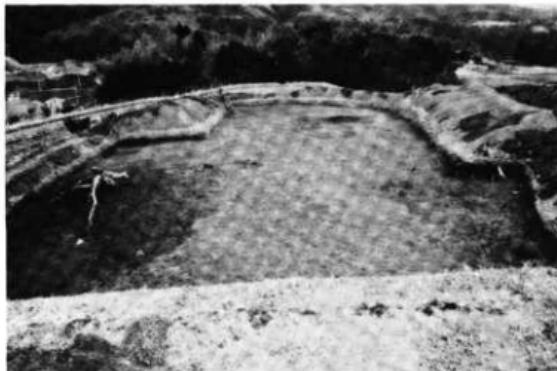


写真17  
Ⅲ区中央部近景  
(西より)



写真18  
集石及び焼石群  
(北より)

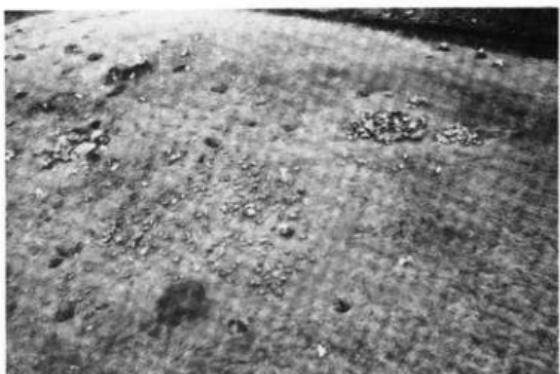
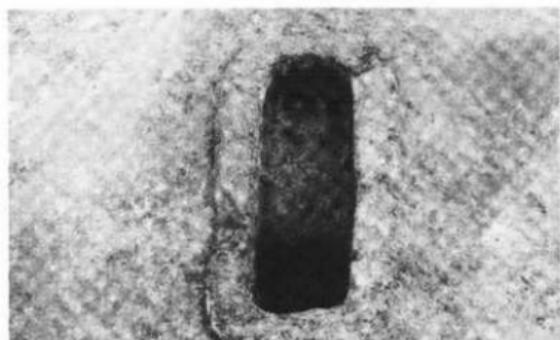


写真19  
集石遺構  
(北より)



写真20  
土 塙  
(西より)



## 7. VII区の調査



写真21 VII区空中写真

### (1) 調査の概要

VII区は、丘陵が早日渡神社から扇状に伸びる斜面に位置する。表土を除去したところ、神社前の平坦な部分は大幅に削られていたが、斜面部分は比較的遺構の残存状況は良かった。

調査の結果、遺構では、中世の柱穴・土塙を多数、古墳時代と思われる竪穴住居跡及び土塙をそれぞれ1基検出した。遺物として、中世では土鍤・陶磁器・石臼・砥石・鉄器・明錢等が、古墳時代では住居跡内より土師器片が数点、縄文時代前期及び後期の包含層より石鏃など、若干の遺物が出土した。

## (2) 遺構と遺物

図区で注目される遺構として、中世では敷石を有する土塙や根がため石の残る柱穴、古墳時代の周囲に柱穴を持つ小型の住居跡がある。特に敷石を有する上塙には、ほとんどに焼土や炭化物の堆積がみられ、その幾つかには鉄滓が出土している。他区での類例（速日峰地区遺跡内）が見られないため、遺構の性格その他詳細は、今後の課題としたい。また、柱穴内の根がため石には、凝灰岩・砂岩・千枚岩などの石材が主に利用されている。柱穴内の出土遺物には土鍬・陶磁器・砥石・明鏡等がある。

古墳時代の住居跡は、西側の一部を残して大部分が削平されているが、一辺3m程の方形プランを呈すものと思われる。主柱穴は4本でいずれも浅く、壁際に寄る。また、床面も木根等で擾乱されていたが、ほぼフラットであると思われる。焼土の集中はないが、西側に残る埋土中には炭化物がかなり含まれていた。各辺のほぼ中央部に柱穴がみられ、東側には更に2本の柱穴がある。遺物等もわずかな土師器片以外は出土しなかったため、明確な時期決定は出来ないが、小型で壁際に寄る柱穴から古墳時代も比較的新しい時期と推察する。

土塙は、長軸2m・短軸0.7m・深さ0.2mを計る。平面形は長方形プランで、両端がやや丸くなる。出土遺物はない。頭位は南西に向く。南西の三方に千枚岩質の板石の一部が残ることから、石棺と考えられる。試掘時に、蓋石と思われる長方形の千枚岩質の板石が、畠の隅に並べられているのが確認されている。また、北西斜面より棺材の破片と思われる千枚岩質の石片が、表上除去の時に多量に見つかっており、付近一帯には相当数の石棺が残っていたと思われる。

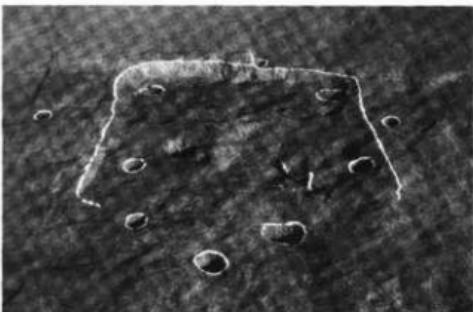
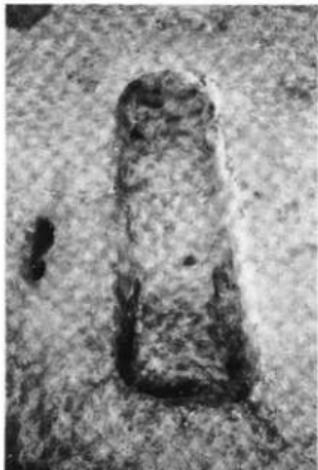


写真22 積穴住居跡（南より）

写真23 石棺？（南西より）

写真24  
敷石を有する土塙①  
(南より)

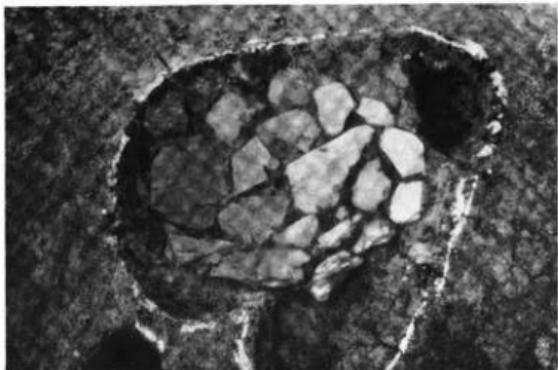
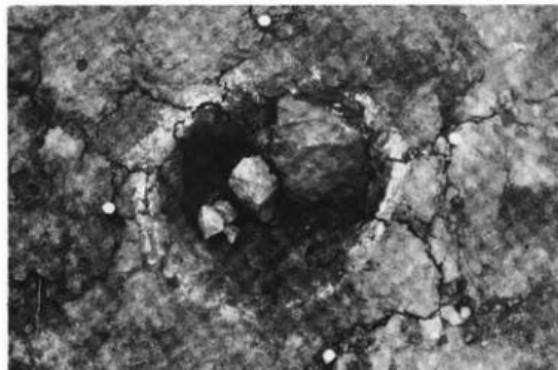


写真25  
敷石を有する土塙②  
(北より)



写真26  
根がため石の残る柱穴  
(南より)



## 8. IX区の調査

IX区は、Ⅷ区からの台地が北東へ伸び、五ヶ瀬側へ落ちる端部に位置する。トレンチ調査の結果、中央部から東側にかけてアカホヤ層が確認された。また、東側部分に急な谷が形成されているものの、落ち際までピット等の遺構が検出できる。

調査の結果、5基の土塙及び多数のピット群を検出した。また、東側に向かって傾斜する部分は、アカホヤ層が消滅するかわりに黒色土の堆積が厚くなり、黒色土層中より打製石斧・土師器・石鏃等が混在して出土する。しかし、土鍤などの中世の遺物は、その上の客土中にしか出土しない。黒色土除去したところ、ローム層に掘り込んだピット群を多数検出した。

IX区の土塙・ピット内より、遺物はほとんど出土せず、焼土・炭化物を含む土塙は2基で、敷石等は持たない。ピットは不規則に並び掘立柱建物等に復元出来なかった。



写真27  
IX区遺物出土状況  
(南西より)

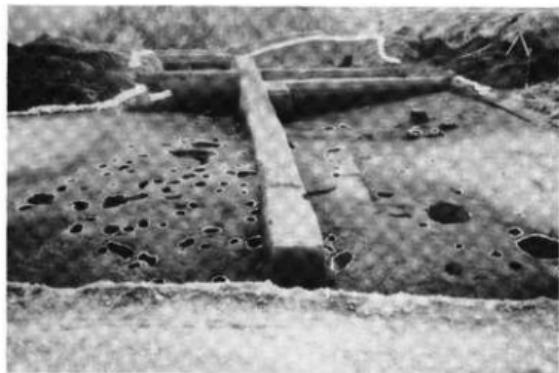


写真28  
IX区遺構検出状況  
(北西より)

### III. おわりに

当地域の発掘調査は、昨年度県文化課によって行われたバイパス工事に伴う発掘調査について2例目である。調査区のほとんどが段々畠で、遺構などはかなり削平を受けているものと思われた。しかし、今回の調査によって、かなり急な斜面や台地端部にも、住居跡や柱穴などの遺構が良好な状況で残っていることが判明した。今後、これまでうっかり見過ごしがちであった地形にも注目し、調査の目を向ける必要がある。

速日峰地区遺跡は、旧石器時代から中・近世にかけての複合遺跡であるが、遺構・遺物は時期によってかなりバラツキがある。

旧石器時代の遺構は検出されなかった。遺物としては、擾乱層中より流紋岩製の剝片等が若干出土したのみで、ローム層中より発見されなかった。

縄文時代早期では集石遺構数基を検出した。これは、現在のところ、五ヶ瀬川流域における最上流部での発見である。砂岩質の角礫よりも千枚岩質の板石片をよく利用しているようである。類例には、一昨年、農地保全整備事業に伴い発掘調査が行われた、五ヶ瀬川対岸下流の藏出遺跡（報告書未刊）がある。遺物は、量的には僅かだが、山形押型文土器・石匙・石鎌・尖頭状石器等が出土した。

縄文時代後期及び晩期では、層位上の疑問は残るとは言え、磨消繩文系土器・市来系土器・磨研土器・打製石斧・石錘等が、かなりまとまって出土している。磨消繩文系土器は五ヶ瀬川対岸上流の多木遺跡や高千穂町陣内遺跡、日之影町大溜遺跡等からも出土しており、五ヶ瀬川を介した交流を伺わせる。また、打製石斧・石錘は、当時の生産活動を考えるうえからも興味深い遺物である。

弥生時代の遺構は検出できず、遺物も下城系・安国寺系の土器が埋土中より若干出土したのみである。下城系土器は高千穂町薄糸平遺跡より、安国寺系土器は延岡市野田町八田遺跡の変形住居跡内より出土しており、速日峰地区遺跡出土の遺物はこの両者の遺跡の中間に埋める資料として注目される。

古墳時代では、12軒の住居跡を検出した。特に、II区の一辺が7~8mの大きさで、壁が検出面で1mを超え、急傾斜地に営まれた大形住居跡は、五ヶ瀬川流域では調査例がなく注目される。それぞれの住居跡の正確な時期決定は、出土遺物の全てにわたって検討を加えていないため、大まかに6世紀の後半以降と推察しておきたい。

中世では、多数の土・柱穴群を検出した。その中でもIV区で検出された、敷石を有し、焼土や炭化物の堆積がみられ、その幾つかには鉄滓が出土する土塙が注目されるが、周辺での調査例がなく詳細は本報告に期したい。

#### 〈参考文献〉

- 石川恒太郎『宮崎県の考古学』吉川弘文館 1968  
北方町史編纂委員会『北方町史』 1972  
宮崎県『宮崎県史 資料編 考古1』 1989

## 速日峰地区遺跡

発行日 1991年3月30日

編集・発行 北方町教育委員会

印 刷 クラフト印刷

宮崎県東臼杵郡北方町子4146  
電話 (0982) 47-3210番